



なきごえ

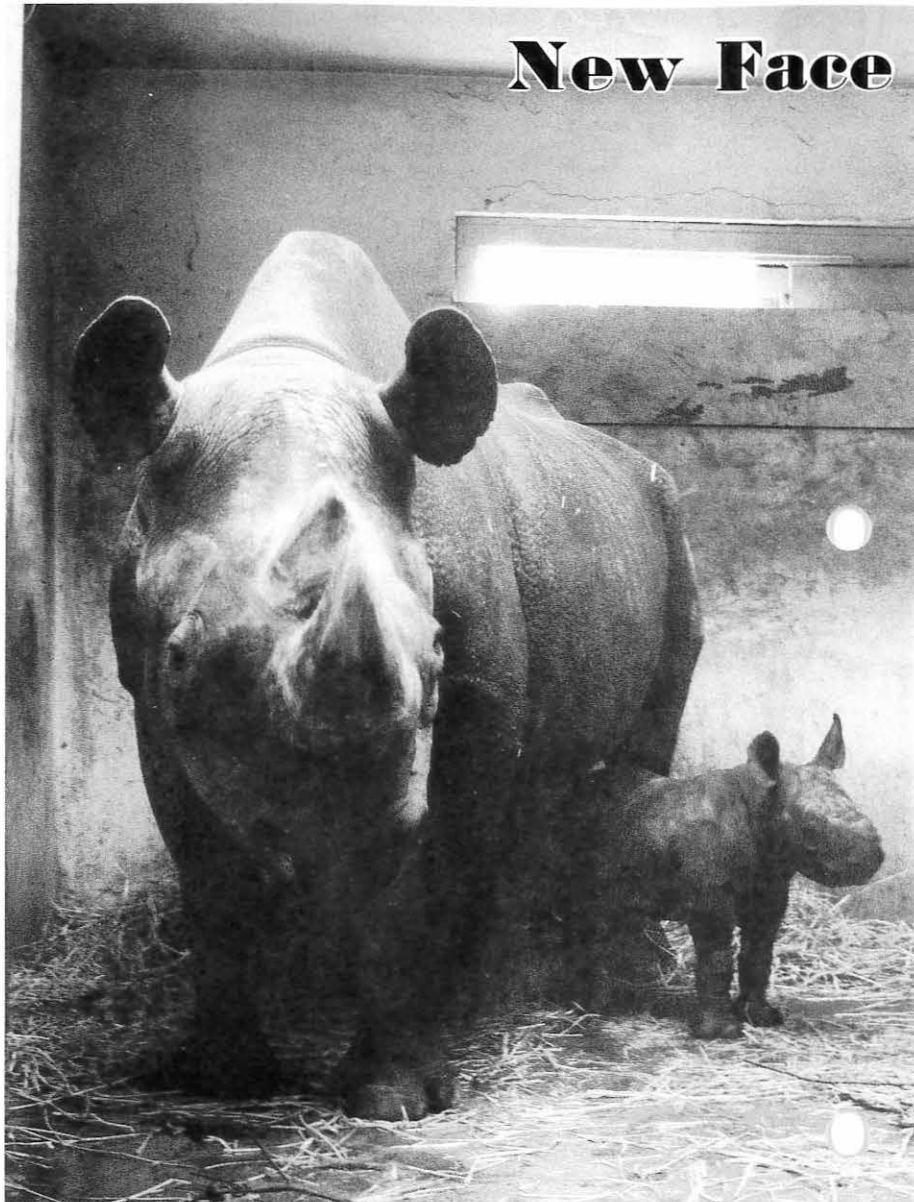


1996

11



大阪市
天王寺動物園協会



(撮影：高見 一利)

- 2 — New Face クロサイ誕生 (高見 一利)
- 3 — 動物と私 雑木林の自然 (稜 いっぺい)
カバーウォッチングチンパンジー (高見 一利)
- 4 — 小型サンショウウオとの共存 (佐藤 孝則)
- 6 — シンガポール動物園訪問記 (竹田 正人)
- 8 — グラフZOO クロサイのサトミ、アメリカへ嫁入り (西村慶太)
- 10 — 獣医室から ⑧ 体重の話 (高見 一利)
- 11 — ZOO DIARY

カバーウォッチング

チンパンジー
サル目 ショウジョウ科
Pan troglodytes
人間にもっとも近い仲間です。アフリカに生息し、集団で生活します。近年、生息地の破壊が進んでいます。写真は当園のメスのアップルです。
(高見 一利)

||||| 動物と私 |||||

雑木林の自然

稜 いっぺい木の実の展示会は雑木林の自然をテーマに、今年6月に大阪国際交流センターで、また9月には松下IMPビルに於てと、二度にわたって開催いたしました。

自 然をアートする事や植物の種子形態の不思議さには、それなりに多くの人達に感動していただき、目的を達し得たと喜んでおります。

動 物と植物のかかわりは、あらゆる環境において密接しているし、小型の哺乳類と木の実の関係、また鳥類や昆虫とのかかわりには特におもしろいものがありますが、今回は本誌の〈動物と私〉のテーマにこだわらずに、雑木林について執筆させていただきます。

一般的に雑木とは杉や桧のように人間にとって役に立たない、あるいは立ちにくい樹木といった意味が含まれます。

また、特に何んの役にも立たないからイヌガヤ、イヌツゲ、イヌガシ等と、植物にとって実に失礼な命名をしたわけですが、犬にとっても失礼な話ですよね。現在は人の目を楽しませてくれる意味でも、それなりに役に立たないものはありません。

クロサイ誕生 ウマ目 サイ科

8月25日にクロサイのメスが誕生しました。母親のサッチャンも天王寺動物園生まれです。今回の仔はサッチャンが産んだ3頭目の動物園3世になります。



稜 いっぺい さん
(ネイチャーアーティスト)

さて、本題の雑木林となると少し話は違ってきます。雑木林とは人間が自然と共存するためにつくった林と理解していただきたいと思います。

昔 は樹木を炭の材とし、落ち葉は田畑の肥料になりました。言い換えれば、良い炭になり落葉樹であることが雑木林の基本なのです。

現在はシイタケの栽培に利用されるクヌギやコナラ、アベマキといったブナ科のドングリやクリの木が雑木林の主役とあって良いでしょう。

早春。落葉した木の床は太陽の恵みで暖められ、落ち葉の肥料で木々は葉を広げ、野草達が芽を出し花を咲かせます。虫達が集まり、小鳥は若葉や花をついばむかわりに樹木の害虫も食べてくれます。

落 ち葉を食べる虫やミミズも養分のある土をつくるのに大切な役割を果たしてくれるのです。

このように、雑木林には何のムダもない自然のローテーションが存在しているようですが、放っておくと林に必要な樹木や雑草が侵入し荒れてしまいます。

そこで人間が登場し、雑木林を守るかわりに雑木を切り倒し頂戴しようというわけです。

人間は切り株から次の芽を出せる部分から切り倒します。

このようにして二次林、三次林と雑木林は存続されるのですが、人類が自然と共存するためのお手本のような気がします。

自然を理解することが人が自然に優しくなれる方法であり、人はその義務があるのではないのでしょうか…?

人類は科学が進歩した今もなお自然の恵みがなければ生きてゆくことができないのですから…。
(りょう いっぺい)

小型サンショウウオとの共存

佐藤孝則

天理大学おやささと研究所
助教

日本に生息するサンショウウオは、1年のほとんどを水中で生活するオオサンショウウオ1種と、反対に、1年のほとんどを陸上で生活する小型サンショウウオ17種に分けられます。また、繁殖場所の水域の状態から、いわゆる「止水性」と「流水性」の二つのグループに分けられます。

近畿地方に生息する小型サンショウウオのうち、「流水性」のグループに該当するのはハコネサンショウウオ、オオダイガハラサンショウウオ、ヒダサンショウウオ、プチサンショウウオの4種で、比較的標高の高い地域に分布しています。一方、「止水性」にはカスミサンショウウオとアベサンショウウオの2種で、前者は近畿地方の低標高地域に広く分布し、後者は京都府と兵庫県の一部地域に分布しています。山間部の溪流や急流域で繁殖できるよう適応進化したのが「流水性」サンショウウオであり、山間部の中腹から平野部にかけての地域、すなわち山麓や扇状地などのように流れの穏やかな水域で繁殖するようになったのが、「止水性」のサンショウウオだといえます。



水中で生活するハコネサンショウウオの1年生幼体「流水性」の代表であるハコネサンショウウオは他の小型サンショウウオよりも水中での適応力は著しく、繁殖期になると指には黒い爪が生え、雄には第五指の外縁肥大が発達するなど、さまざまな相違点がみられることから、1属1種の独立した種として分類されています。また、以前は1属1種として分類されていたが、今日ではサンショウウオ属の1種とされているオオダイガハラサンショウウオも、近畿地方では紀

伊半島の奈良、三重、和歌山にまたがる山間部で生息しています。いずれの種も溪流や急流域で繁殖するのが特徴です。

最近の山間部では、以前のようなゴルフ場造成や観光開発による自然破壊は少なくなり、また、不幸中の幸いとも言えるべきか、林業の低迷による造林地の荒廃が結果的に幸いして、「流水性」サンショウウオの生息環境の破壊は食い止められているようです。大台ヶ原山や大峰山脈周辺にもハコネサンショウウオやオオダイガハラサンショウウオは生息していますが、現在のところ、これらの種が自然破壊による危機的状況を迎えているとはいえません。ただ、国有林内の生息環境はまだ予断を許さない状況だといえます。いずれにしても、ずっと以前に比べれば彼らの生息環境は悪化していることは事実ですが、最近のバブルの崩壊が山間部の流水性小型サンショウウオに安堵感を与えているようです。しかし、むしろ彼らにとっては、今は束の間の時期なのかもしれません。

一方、「止水性」サンショウウオはどうかというと、「流水性」サンショウウオよりもより危険が迫っている状態だといえます。特にカスミサンショウウオは山麓周辺や低標高を主な生息地としていることから、人間社会から悪影響を受けやすい環境にあることは確かなようです。



陸上を移動するカスミサンショウウオの成体

昔から、奈良・大和地方ではカスミサンショウウオのことを「畑ドジョウ」と呼んでいました。人間が畑や耕作地として利用する山麓や谷間で、カスミサンショウウオをよく見かけたからです。たとえば、畑を起こすとき越冬中の個体を土の中で見つけたり、早春の畑の水たまりの中で、繁殖のためにやってきた個体をよく見かけたからだと思われまふ。いずれにしても、カスミサンショウウオは人間とは馴染み深いサンショウウオなのです。

彼らが生息している地域は、私たち人間にとっても生活しやすい地域だということで、今日では開発しやすい場所として利用されています。その結果、竹藪や雑木林は切り開かれ、広大な住宅地へと変わっているのです。

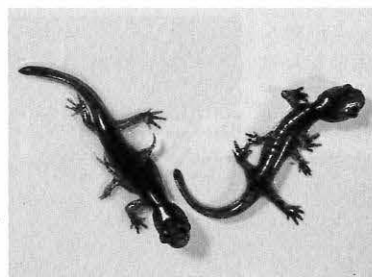
最近、開発行為が行われる際には、「環境アセスメント」が義務づけられるようになってきましたが、まだまだ小規模開発行為には適用されてい

ません。かりに「アセスメント」が適用されたとしても、鳥獣類や昆虫類に比べて両生類の生物学的評価は軽視され、相対的に影響評価が低く見積もられる傾向にあります。このことは、両生爬虫類が一般的に人間に嫌われる対象の動物であることと、無縁ではないように思われます。

このように、「止水性」サンショウウオの置かれている立場は、今日においては危機的状況にあるといえます。事実、私が住んでいる天理市の山麓では、以前はたくさん見かけたはずのカスミサンショウウオが、今ではほとんど見られなくなっています。奈良盆地の山麓林縁部や扇状地では、おそらく個体数は激減しているだろうと予想されます。

カスミサンショウウオが減少したり、かりに絶滅したとしても、今の私たち人間にはほとんど影響がないように思われますが、決してそうではありません。住宅地周辺の水たまりで発生する蚊の幼虫(ぼうふら)を、サンショウウオの幼生がよく食べることはあまり知られていないようです。目に見えないところで頑張っている彼らの活躍を私たちはもっと知るべきでしょう。また、将来において、彼らの存在が見直されないと限りません。絶滅だけは避けなければなりません。むしろ、彼らも我々の仲間だという気持ちに立つべきでしょう。ましてや、彼らの遺伝子に悪影響を与えることは決して許されることではありません。

私 は以前から、北海道に生息する「止水性」サンショウウオ2種の生態を調べています。そのなかの1種、エゾサンショウウオのある個体群に奇形が多発するのを発見しました。腹部の脇から奇妙な足が三つも四つも現れる現象で、そのこと以外は外見上つうの個体と全く変わりません。



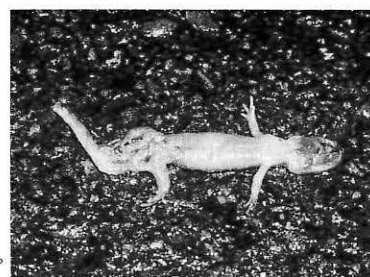
変態直後のエゾサンショウウオの奇形幼体

因果関係については、詳しい調査をしていないので分かりませんが、周囲をみても化学工場や放射能が発生するような場所はなく、むしろ、河岸段丘の法面の林に新興住宅地が入り込んでいる比較的閑静な場所です。ただ似たような地域と明らかに異なる点は、段丘面からしみ出る水が付近の複数のモーターから出てくる排水と混ざって緩やかな流れの小川となり、この水域で繁殖した個体群の卵のう

から多数の双子、三つ子、四つ子の卵が現れること、そしてこのような卵から奇形の幼体に変態・上陸することだけです。しかし、何よりもまして罪深いことは、私たち人間はこの地域のエゾサンショウウオを、既に一つの奇形個体群に変えてしまったことです。五本以上の足を持った多数のエゾサンショウウオの成体が水中で繁殖する様子は、何とも異様な光景ですが、このようにしてしまった私たち人間は、猛省すべきでしょう。

猛省すべきは、これだけではありません。彼らの祖先が何千年、何万年も前から繰り返してきた繁殖地への移動を、現在の私たちが阻害していることです。彼らの行動圏は意外に広く、時には人間が行動圏内に勝手に道路をつくったりします。そうすると、当然のことながら、車にひかれて死ぬサンショウウオがでてくるわけです。

写真は、北海道の観光地の路上で起きたエゾサンショウウオの交通事故の現場写真です。



繁殖場所へ向かう途中、車にひかれた直後のエゾサンショウウオの成体

人間にとって楽しいゴールデンウィーク、サンショウウオにとっては最も大事な繁殖期。この時期に起きたこの事件は、繁殖地へ向かうために道路を横断せざるを得ない彼らの現状を、身をもって訴えているようです。当然のごとく、ひき逃げした人間は全くこのことに気づかず、車を止めることなく去って行くのです。

近畿地方においても、このような事故はおそらく今もあるだろうと思います。特に、カスミサンショウウオは、住宅地の周辺で人知れず繁殖していることが多く、そのため、奇形個体や犠牲個体が現れないとも限りません。

いずれにしても、人間の言葉が話せない彼らの身になって人間社会を見ることは、人間のおごりを反省する意味において大事なことであり、欠かすことのできない視点だろうと思います。そのためにも、両生爬虫類に対する偏見をなくし、奇形を余儀なくさせられている彼らの現状を認識することが、小型サンショウウオとの共存を図るうえでの大切な第一歩だろうと思います。

(さとう たかのり)

シンガポール動物園訪問記

今年の5月末にシンガポールに行ってきました。表向きは結婚10周年の記念旅行でしたが、本当の目的はジュロンバードパークとシンガポール動物園、そして一昨年オープンしたナイトサファリの見学です。これらシンガポールにある動物園は欧米諸国の動物園のコンセプトと展示手法を取り入れた、アジアの中で最も先進的な動物園です。これらの動物園を入園者の立場で見学し、自分自身楽しみながら当園における今後の動物園創りの参考にする、趣味と実益を兼ねた旅行でした。それでは誌面をお借りして、この3つの動物園を簡単に紹介し、各動物園の見どころと見学した感想をお話します。

〔ジュロンバードパーク〕

シンガポールの西部、ジュロン地区にあるジュロンバードパークは鳥類だけを飼育展示した世界的に稀な動物園で、1971年にオープンしました。街の中心からタクシーで約20分のところにあり、広さは約20ヘクタール、飼育展示している鳥類の数は600種800羽以上にのぼります。

この動物園の目玉は何といっても熱帯鳥類の展示と繁殖です。シンガポールが熱帯地方に位置しているため、熱帯鳥類の飼育・繁殖は困難ではないかもしれませんが、その種類と数には驚きです。特に、おでこの部分に角のような突起を持つことから名付けられたサイチョウの仲間のコレクションは見事です。また、その美しさから極楽鳥とも呼ばれ、乱獲によって今や絶滅の危機に瀕しているフウチョウの仲間も3種類展示されていて、そのうち2種類が繁殖していました。写真の鳥はベニフウチョウです。この他、パロット・パラダイス（インコの楽園）でも数多くのインコ類が植物と共に展示されていました。



この他の見どころ ベニフウチョウ

たとえば、各々の鳥の特性を活かしたバードショーです。私たちが見たのは2つで、1つはフラミンゴ類やコンゴウインコ類などを使ったオールスター・バード・ショー、もう1つは猛禽類を使ったフジ・ワールド・オブ・ホーク・ショー（フジフィルムがバックアップしていたのでちょっと驚いた）でした。前者は以前いくつかの動物園で見たものとよく似ており、さほど感動しませんでした。後者のようなショーは初めてでしたが、このショーは、いくつかのタカの仲間を使って猛禽類の獲物の捕り方を見せるものでした。たとえば、餌である肉片を小鳥に見立て空に投げたり、毛皮のようなものを地上を走る小型の哺乳類に見立ててロープで引きずったりして、それらを捕まえさせる姿を見せていました。また、写真のように横たわるスイギュウのレプリカに餌用の肉を入れておき、ハゲタカがいかにもスイギュウの死体をついばんでいるように見せていました。いずれのコーナーも猛禽類の獲物の捕り方が一目瞭然と理解でき、楽しみながら学習できるようにみごとに構成されていました。さらに、このショーの最後には、鳥達とその生息場所が開発による自然破壊によって年々減少していること、そのために一人一人が自然保護の意識を持つことが重要であるとスタッフが訴えていました。



とにかく、広々とした場所で色とりどりの鳥達が自由に飛ぶ姿を見て満足するだけでなく、鳥類の生態や行動を通じて環境学習もできる素晴らしい動物園でした。この動物園全部をゆっくり見て回るのに2日間必要でした。

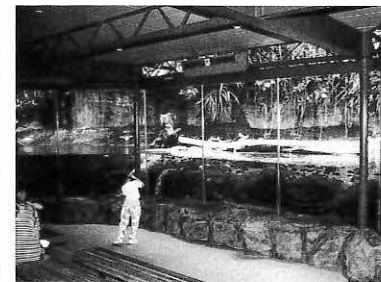
〔シンガポール動物園〕

街の中心から北西に向かってタクシーで約20分走ったマンダイ地区にシンガポール動物園はあ

ります。この動物園は1973年に開園、動物を檻に収容せずに見せるオープンシステムの動物園として世界的に有名です。総面積は28ヘクタールで、熱帯の木々でおおわれた緑豊かな動物園で、哺乳類95種約680点を中心に、鳥類74種約360点、爬虫類・両生類44種約230点が飼育展示されています。当園の2倍以上の敷地面積に、当園より若干少ない動物数が展示され、飼育されている動物や入園者にとってゆったりとしたスペースが確保されています。当園と比較して鳥類の飼育展示数が少ないのは、先に紹介した鳥類専門の動物園ジュロンバードパークが近隣にある関係でしょう。動物園としての分業、つまり各動物園が特色を良く出していると思います。

この動物園にもいくつかの見どころがありますが、しいてあげるとすればオープンシステムに代表される展示の工夫、アニマルショー、そしてフィーディングタイムでしょう。

オープンシステムとは、檻や柵を用いずに、植物や空堀・水堀で動物と動物、動物と人との境界線を作り、できるだけ自然の形で飼育・展示する方法です。ほとんどの展示場でこのシステムが採用され、視界をさえぎるものはありません。当然、動物と人との距離は大きくなりますが、もともと距離があってしかるべきもの。さえぎるものがない分、動物たちをより身近により自然に感じました。また、世界最小のサルの仲間、マーモセット類は園内で放し飼いされていました。いたずらする入園客が少ないのか、かなり近くまで寄ってきました。展示方法における工夫では、この他にホッキョクグマとコビトカバのアンダーウォータービューイング（いわゆる水中も見せる展示）が気に入りました。最近、ホッキョクグマではこの手の展示方法を国内でも見ることができるようになりましたが、コビトカバはそれ自体大変希少な動物であり、日本国内では2園でしか見ることができません。ましてや水中のコビトカバなど…。コビトカバ舎は、単に水中の姿を見せるだけでなく、写真にあるように展示場全体が生息地を再現した形であり、非常に優れた展示だと思えます。当園で建設予定の新カバ舎の参考になりました。



生息地を再現したコビトカバ舎

日本でもいくつかの動物園で動物のショーを行っているところがありますが、シンガポール動物園

では様々な動物のショーを見ることができます。ショーに関しては、賛否両論ありますが、動物の特性や能力を一般の人が知るには非常に良い1つの展示方法とも考えられます。そういう意味ではフィーディングタイムも良い展示方法の1つだと思います。飼育担当者が各動物舎の前に立ち、動物の説明をしながら給餌を行っていました。写真はちょうどクモザルの前で説明をしているところです。入園客はそのおもしろい説明を聞きながら、動物達の餌の種類とその食べ方を見ることが出来ます。飼育係はエンターテイナーであるべきだと感じました。



クモザルの説明を聞く

〔ナイトサファリ〕

ナイトサファリは道を挟んでシンガポール動物園の反対側で一昨年オープンした、世界で初めて夜間のみ（夕方6時～深夜0時）開園している動物園です。自然界には、夕方から深夜かけて行動する野生動物も多く存在します。夜の神秘的な動物の姿を見ることができるので、大変人気があるようです。平日にもかかわらず地元の人や観光客でいっぱいでした。特に、日本人観光客が多いせいか、日本語のガイドブックがあったり、園内を回るトラムカーでは日本人スタッフが日本語でガイドしていました。

ラッキーにもスナドリネコ（フィッシングキャット）が泳いでいる魚を前足の爪で引っかけて取った姿を見ることができました。フラッシュ撮影は禁止されていたため、きれいな写真が撮れず、お見せできないのが残念です。

以上、シンガポールにある3つの動物園を簡単に紹介しました。詳しく紹介するには誌面の関係上不可能です。百聞は一見にしかず。なにはともあれ、一度ご覧になってはいかがでしょうか。シンガポールには、見るところ（動物園）、遊ぶところ、食べる場所が沢山あるので、機会があれば、また訪れてみたい場所です。

（飼育課：竹田正人）

クロサイのサトミアメリカへお嫁入り



クロサイはその立派な角を目的とした密猟のため絶滅寸前の動物です。そんなクロサイの繁殖計画のため天王寺動物園のサトミがアメリカの動物園へお嫁に行きました。(文:西村慶太、撮影:榊原安昭)



1994年4月20日、父トミと、母さつちゃんとの間にサトミが誕生しました。こんなに小さかったサトミも...



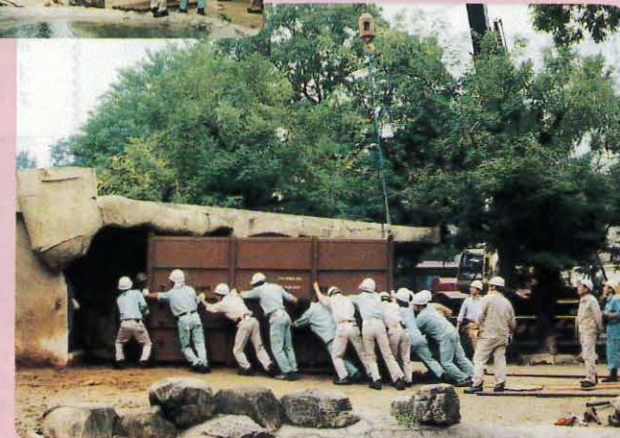
約1年でこんなに大きくなりました。



大きくなってサトミはお母さんが大好き。そんなサトミにアメリカのカールドウェル動物園への嫁入り話が決まりました。



輸送用のオリを設置します。サイは力が強いのでオリも鉄製で頑丈です。



オリを出入口に設置し、この中で餌を与えてオリに慣らします。



サトミはすぐオリに慣れてくれて設置3日後にオリの柵を閉じ、収容しました。

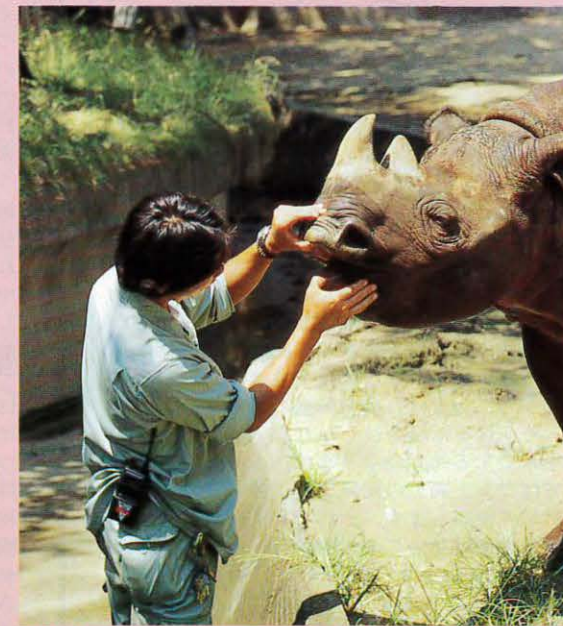


10月7日サトミの入ったオリを輸送車に積み空港へ... アメリカへの旅立ちです。



さようならサトミ。

入園者を楽しませてくれてありがとう。



獣医室から

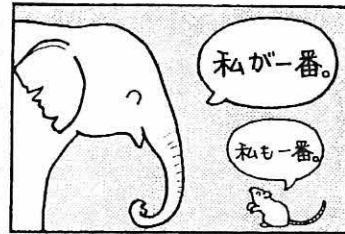
68

『体重の話』

子どもの頃には増えたと言って喜び、お年頃になると減ったと言って喜ぶ。人間特有の心の動きでしょう。思い当たる方は多いと思いますが…体重の話です。

天王寺動物園では大きなものから小さなものまで、およそ300種の動物が生活しています。これらの動物の中でもっとも重いものは、皆さんご存じの通りアジアゾウです。ゾウは陸上動物でもっとも大きく、重い動物です。(アジアゾウよりアフリカゾウの方が大きいです。)アジアゾウの体重は2トンから5.5トンということです。天王寺動物園の3頭は3トン前後といったところでしょうか。カバも体重ではゾウに引けを取りません。では小さな方はどうでしょうか。哺乳類では夜行性動物舎で見ることのできるカヤネズミが当園でもっとも小さく軽い動物です。体重は5グラム程度です。ちなみにスズメの体重が10グラム程度、1円玉1枚が1グラムです。先日爬虫類生態館で繁殖に成功したアオハリトカゲの子どもなどは1グラムありません。

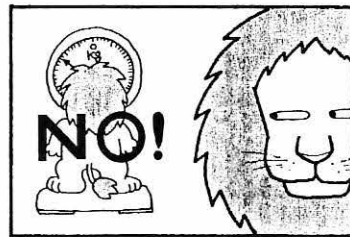
動物の体重をできるだけ正確に知りたいと思うのは、けがや病気によって治療が必要になったときです。必要な薬を与えるようにも体重が



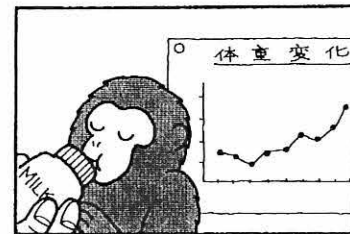
わかっていなければ与える量が決められません。小さな動物は場合によっては捕まえて体重を計ることができなくもありません。しかし大きな動物や猛獣など近寄ることが危険な動物は、なかなか体重を計ることができません。麻酔をかければ猛獣などでも体重を計ることはできますが、その体重がわかっていなければ麻酔薬の量も決められません。そう言った場合はしかたなく、おおよその体重を推定することになります。もちろん完全な山勘ではなく、過去の記録など手に入るデータを参考にして検討します。それでも正確に言い当てることは大変難しいことです。

治療が必要などときに限らず、日頃から体重がわかっていると健康管理に役立つことは確かです。もっとも体重が計りやすく、その増減が気になるのは人工哺育や人工育雛の時でしょうか。世のお父さん、お母さん経験者ならわかると思い

ますが、わが子の成長は気になるものです。ちゃんと人並み？に育っているか、栄養は十分足りているか、病気の兆しはないか、などなど体重の変化を見ながら考えているものです。動物を人工的に育てる場合も同じです。もちろん成獣でも定期的に体重が計れば同じようにチェックできますが、動物園の場合そのような動物種は、多くはありません。



一般に体重を計ることが難しい動物園の動物ですが、種によっては定期的に計っているものがあります。たとえばペンギンは毎年春と秋の2回計っています。ペンギンをバケツや段ボール箱の中に入れて、台ばかりで計るのです。コアラは毎週計っています。こちらはコアラを丸太にしがみつかせて、丸太ごと人が抱えて体重計に乗ります。



昔は野生動物の食べ物についてあまり知られていなかったため、十分な栄養を与えることに苦労したようでした。しかし最近はそのような分野についても研究が進み、一部の種を除いてそれぞれの動物に適した餌が、わりと簡単に手に入るようになりました。そうすると今度は栄養の過剰摂取、つまり「太りすぎ」や、さらには成人病のような病気もみられるようになってきています。ですから体重を増やさないうえ、あるいは減らすために食事制限をしているものもいます。



動物園の動物たち。体重は小さくても大ききまですが、体重について思うことは人間に関する場合とそれほど変わりはありません。もっとも人間特有の心の動きが強い人も多数いらっしゃると思いますが…。



(飼育課：高見一利)

- 9/2. 8月に保護したカルガモが元気になったので、自然復帰させました。
- 9/3. ホンドタヌキを1頭保護しました。アカカンガルーが交尾をしました。
- 9/4. キジバトを1羽保護しました。
- 9/7. 8月に保護したドバトが元気になったので、自然復帰させました。
- 9/9. ホンドタヌキの幼獣1頭とヒヨドリ1羽を保護しました。
- 9/11. ドバトを1羽保護しました。
- 9/12. 大阪市内を徘徊していたニホンザルが捕獲され、一時預かりました。
- 9/13. 昨日捕獲されたニホンザルが大阪府庁によって箕面の山に帰されました。

9月15日 敬老の日
にちなんで、当園で最も長く飼育しているアジアゾウの“春子”と2番目に長く飼育している“ユリ子”にリンゴをプレゼントしました。また、3番目に長く飼育している国内最長老チンパンジーの“シュジー”を普段展示している屋内展示室から出して、屋外放飼場で仲間とともに展示しました。



ニホンジカが1頭生まれました。

- 9/16. “鳥の楽園” バードケージでハタダトキがふ化しているのを確認しました。
- 9/17. マレーグマの赤ちゃんが生まれました。誕生の確認は鳴き声で行いました。母親を安静にするため肉眼による頭数の確認はしていません。ドバトを1羽保護しました。
- 9/18. ドバトとキジバトを各1羽保護しました。また、8月保護したキジバトが元気になったので、自然復帰させました。
- 9/19. 9月17日に生まれたマレーグマの赤ちゃんの頭数確認を行いました。母親は大変落ち着いており、壁にもたれた母親のお腹の上には1頭の赤ちゃんがいました。キジバトを1羽保護しました。ソテグロヅルの足が腫れていたため、検査のため血液を採取しました。
- 9/20. 動物愛護週間にもなって園内で無料動物相談を行いました。日曜・祝日で合計6回実施しました。
- 9/22. エゾビタキを1羽保護しました。

今月もおもしろ情報満載

ZOO DIARY



9月23日 秋分の日(彼岸)にちなんで動物慰霊祭を行いました。子供たちや関係者のあと、動物代表としてボールパイソン(ヘビ)と担当者が献花しました。

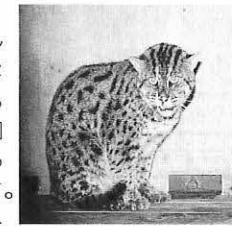


9月24日 グラントシマウマのオスが入園しました。広島市安佐動物公園からフリーディングローン(繁殖目的の借受)で来たもので、検疫終了後一般公開しました。



9/25. レッサーパンダの屋外展示を再開しました。夏の暑さをしのぐため冷房のきいた屋内展示室で展示していました。キジバトとゴイサギを各1羽保護しました。

9月27日 シンガポール動物園からスナドリネコが2頭贈られてきました。国内で飼育しているのは当園だけです。検疫終了後ヤマネコ舎で展示しています。



9/28. ハシブトガラスを1羽保護しました。

■お知らせ■

- 「動物クラフト作り」
日時：11月17日(日) 午後1:00～
場所：レクチャールーム
- 「動物園裏側ウォッチング」午後1:00～
日時：12月15日(日)
場所：レクチャールーム

訂正：10月号P4、写真説明文中、「屋根を旋回」は「尾根を旋回」のまちがいでした。
10月号P5、写真の上下が反対でした。
10月号P6、執筆者名「中上正彦」は「中上正幸」のまちがいでした。

愛ある暮らし、応援します。

Kintetsu

近鉄百貨店

DEAR LIFE BOOKS



生態・飼育・図鑑が一つの本の 中にギッシリ

動物園で暮らす様々な生き物達、自然の中ではどんな暮らしをしているのか？ 動物園での世話の仕方は？ 仲間とは？ など、写真と精密イラストをまじえ紹介します。

〈くらしかいかたシリーズ〉既刊本
B5変型判・オールカラー

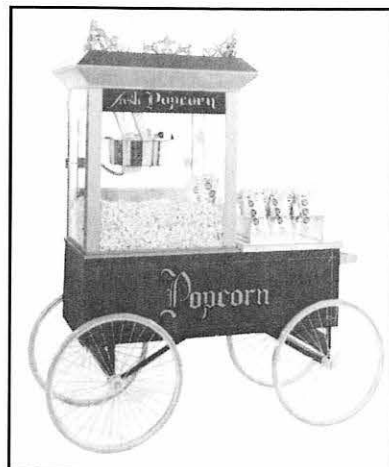
むしくらしかいかた

野山でみかける身近な昆虫たち
250種を紹介。

ちいさないきものくらしかいかた

昆虫以外の小さな生き物を320
種紹介。

お求めは、お近くの書店で。 ひかりのくに株式会社 本社/〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表



マスタのポップコーン



〈営業品目〉 製造機械・保温機 他
生コーン・袋詰ポップコーン・原材料一式

(株)増田食品 〒561 大阪府豊中市穂積1-10-30
TEL (06) 865-0165

新・きれいな色 FUJICOLOR SUPER G ACE 400



カラの大林

桜橋本店 ☎341-8091
阪急三番街店 ☎372-5031

狼
その生態と歴史



平岩米吉著

ニホンオオカミの正史
「大の真神」は知られた古代から、狩猟と恐れられ、やがて絶滅していくニホンオオカミの生態と歴史を、数十年にわたって収集した正確な資料と、生態学の観点をもとめあつた。

ニホンオオカミの生態と歴史の集大成

狼 — その生態と歴史 —

平岩米吉[著] A5判 308頁 定価2,678円(税込)

ニホンオオカミは今もどこかで生きのびているのか——。狼と生活をともにした実体験を基盤に、数十年にわたり収集した正確な資料と生態学の眼をもって、ニホンオオカミの特徴や大きさ、性質などを分析。今も根強く残っている残存説を検証するとともに、絶滅へといたる歴史をも詳述する「ニホンオオカミの正史」。

築地書館 〒104 東京都中央区築地2-10-12 TEL 03-3542-3731 FAX 03-3541-5799 振替 00110-5-19057
●ご注文は、最寄りの書店または直接上記宛先まで。(直接郵送時の送料は一律400円です。)

新作
貸出用ビデオ「楽しい天王寺動物園」
19分(10本常備)

- 対象/保育園・幼稚園・小学校の先生
- 貸出期間/10日間
- 貸出料/無料(但し郵送料510円は必要)
- 申込先/当協会まで手紙かハガキでお申込下さい。

コアラテレホンカード(限定販売)
好評発売中 ¥800(50度用)

天王寺動物園の本 入園の記念・手引に……



オールカラー
500円 園内売店にあります。

大阪市天王寺動物園協会 〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06)771-0201

ああ、男のやすらぎ。ジョージア。

ひと息入れよ。ジョージアで、

Enjoy **GEORGIA**

経銷：三井物産株式会社
TEL: 03-5561-1111
●おまかせの配達にはご協力下さい。

鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達

- ・医学実験用動物
- ・宣伝用、テレビ用、貸動物
- ・原色世界雑類図鑑(34種1枚もの)要郵便券250円

有限会社 吉川商会

本社 神戸市中央区中山手通3丁目11番4号
電話 (078) 221-8195(代)

飼育場 兵庫県小野市来住町1513番地

たのしい動物のお話は、
ガイドマシン(動物説明機)で、どうぞ!!

園内、主要動物舎
30数ヶ所にあります

関西特機株式会社
電話 06-762-2333
1回 30円

動物園内での
お食事、
ご休憩は

動物園内.....
中央売店
TEL 06-771-0973

お食事・飲み物・おみやげ 動物園内
南園売店 TEL 06-771-7110

..... LOTTE

みんな大好き

コアラのマッシュ

〈チョコレート〉 〈ストロベリー〉



雪印
つぶよみ
フルーツ
ヨーグルト



●ライチミックス

●ストロベリー

●アップル

●ピーチ

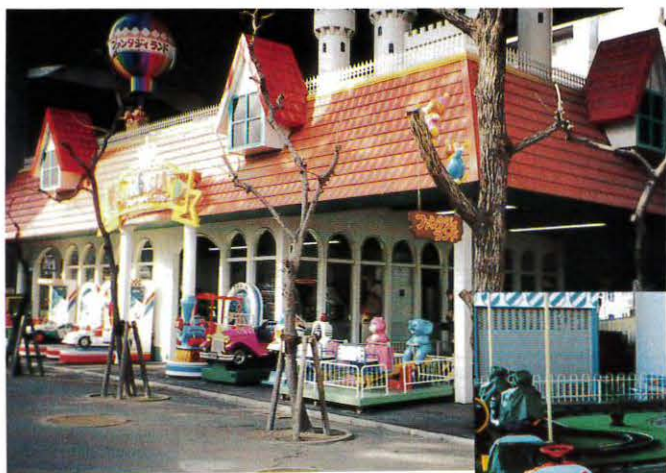
●フルーツミックス

おいしさは、産地のよさです。

台湾のライチ、フィリピンのナタ・デ・ココとパイナップル——●ライチミックス
 国産の女峰、オレゴンの特産、中南米のチャンドラー、季節の旬を追って——●ストロベリー
 日本の富士、中国・韓国の国光。それぞれおいしい季節の——●アップル
 桃といえば中国です。そして韓国。旬に一括収穫した白桃で——●ピーチ
 アプリコット、メロン、アップル、パイナップル、ミカン。果物狂の——●フルーツミックス

お待たせ
新発売

希望小売価格・税抜 **各100円**



◎園内3ヶ所(南園高架下・北園中央デッキ北側・北園高架下)に各種のりものがあります。

久竹娛樂株式会社
TEL(06)541-3938(代)



一日
愉快地
たのしめる

なきごえ 1996年11月10日発行(毎月10日発行)第32巻 第11号(通巻375号)

編集/大阪市天王寺動物園事務所

発行人/大阪市天王寺動物園協会 伊東重朗

印刷所/株式会社 松村善進堂 定価150円(送料共) 1年継続(12部) 1,650円(送料共)

〒543 大阪市天王寺区茶白山町6-74

電話 大阪 (06)771-0201

振替口座 00930-2-37823

編集委員 (樽本 勲/馬話好文/増野悦敏/中川哲男/吉本昌俊/長谷川敏昭/落合正彦/宮下 実/榎原安昭/森本委利/高橋雅之/市川久雄)
 (中上正幸/堀 眞佐子/森原祐二/竹田正人/高見一利/大野尊信/野口秀高/早川 篤/村上勇一/西村慶太/山元貞幸)